

のり系ゴキブリ
南方サツマ

紀南で分布拡大

研究者「地球温暖化が影響か」

国内では四国や九州、南西諸島などが生息域だった羽を持たない南方系のサツマゴキブリ(オオゴキブリ科)が、紀南地方の各地で分布を拡大している。これまでひっそりと暮らしていたものが、2〜3年前から目立つようになった。特に今年は目撃例が多く、県立自然博物館の場嶋専門員(53)は「ここ2、3年冬が温かく、地球温暖化の影響もあるだろう。今後、越冬する個体が増えると爆発的に広がる可能性もある」と話している。

県内で生息が確認され、潜んで入ってきた可能性があるのは、すぎみ町江の童謡の園公園や由良町の白崎海洋公園、白浜町、二十数年前に町田江津良海岸周辺など。大きな整備で生息地から植物を持ち込んだ際にプランターや葉の間に

民家周辺で生息が確認されており、白浜青少年センター(小出貴史所長)の周りでは2〜3年前から目立ちはじめた。小出所長によると、着任した5年前にはまったく見かけなかったが、2〜3年前からプランターや落ち葉の下で頻繁に見られるようになった。特に今年は多く、9月には室内の食器かごやコーヒーメーカーに入り込んで死んでいるのを職員が発見したという。

紀南地方のサツマゴキブリの分布を調べている京都大学瀬戸臨海実験所の久保田信助教授(51)に白浜町黒潮台の男性(41)から「今年7月に道路で死んでいるのを見つけた」という連絡も入った。10月下旬には田辺市芳養町の民家近くの道路をはっているのを主婦(48)が目撃した。久保田助教授は「地球温暖化の陸上での証拠。いい指標になれば」と話しており、今後とも興味深く観察を続けていくという。

サツマゴキブリは体長3〜4センチ。九州では開けた海岸近くの屋外に生息

している。害虫として嫌われているクロゴキブリやチャバネゴキブリなどと違い、

羽が退化してまったく飛ばず、体内で卵から幼虫がかえる卵胎生。場的場専門員は「プラン

ターや植木鉢のすき間、フェニックスやハマユウなど植物の葉の間などによく入り込む。このため、

人為的に他の地域へ移動する可能性もあり、越冬した場合、そこに定着する」と話している。



サツマゴキブリが隠れ場所にするプランター
(白浜町阪田の白浜青少年センターで)



プランターの下に隠れているサツマゴキブリ